

江戸隠密帳

山手樹一郎

長編時代小説

桃園文庫



江戸隠密帖

定価 480 円

1986 年 6 月 15 日 初版発行

(検印廃止)

1988 年 12 月 15 日 第 3 版発行

著 者 山 手 樹 一 郎

発行者 唐 澤 俊 介

発行所 株式会社桃園書房

〒101 東京都千代田区三崎町 2-11-7

電話 03-263-1171 (代表)

振替・東京 6-3310

印 刷 大日本印刷株式会社
製 本

© Kiichiro Yamate 1986

ISBN4-8078-0061-2

Printed in Japan

落丁乱丁の場合はお取りかえいたします

文庫

江戸隠密帖

山手樹一郎

目次

恐怖の街	7
業の深い女たち	67
鬼	140
浪乃という女	199
小名木川の河童	252

江戸隠密帖

恐怖の街

一

樽谷平太郎はその夜もお茶の水から浅草橋のほうへ足を向けていた。まだ宵の口に入っただけだが、このごろの江戸は物騒なので、日が暮れるとほとんど人通りが絶え勝ちになる。空には五日ほどの月があつて、町筋はほのあかるかつた。

「失礼ですが、お武家さん——」

ちやうど昌平橋の北袂へかかつた時、明神下通りのほうから出てきた若い娘に声をかけられたのである。

「わしかね」

「はい。もし両国のほうへおいでになるんですたら、道づれになつただけませんかしら」
年ごろ十九か二十、娘にしては少し年増になりかけているが、きりつと目鼻立ちのとなつた人目につくような下町娘だつた。

「どうしたんだね、若い娘さんがいま時分一人で出歩くなんて」

「いやだなあ。あたしはそんな怪しい者じゃありません。その明神下の叔母さんの家で、つ

い話しこんでしまつたもんですから」

「いや、あんたは美人だから、むしろ怪しい奴に狙われるほうだ」

「ですから、道づれをお願いしましたの、あたしは両国薬研堀の小料理屋の娘で、お延つていうはねつかえりなんです」

娘はもうさつきと肩をならべて歩き出している。

「つまり、小料理屋の看板娘つてわけか」

「世間ではそういつてくれますけれど、あいにくお嫁入りの口など、まだ一度もかかったことはありませんの」

「それは気の毒だなあといいたいが、その実悪いひものようなものが、うしろについているんじゃないのか」

「あらお武家さんは案外いいにくいことを、はつきりおっしゃるんですね。——これからどちらへお出かけになるところかしら」

「別に当てはないんだ。わしもこれでぜひ逢いたいなんて女は、一人も持っていないほうなんですね」

「本当かしら——じゃ、金と力はあるほうなんですか」

「うまいことをいうなあ、わしは樽谷平太郎、人呼んで樽平というしがな浪人者でね、あいにく金も力もない。気の毒だったねえ」

「まあどうして——」

「あんたはわしを、いざという時の用心棒にする気で道づれにしたんだろうが、追剝や辻斬りが出れば人より先に逃げ出す組なんだ」

「ふ、ふ、それなら御安心なさいまし。お金のない人なんかを狙う、間拔けな追剥はまあないでしょうからね」

お延はあつさりやりかえしてわらつてゐる。なかなか隅におけない娘だ。

道はいつか佐久間町河岸へかかつて、対岸はよく追剥や辻斬りの出たがる柳原の土手つづきである。

「しかし、やつぱり物騒な御時勢なんだね。花のお江戸もこのごろは日が暮れると、こんなに淋しくなるんだからね」

この河岸通りも町家はもう軒並み大戸をおろして、歩いている人影などほとんど見当らないのだ。

「本当にねえ。押込み強盗、辻斬り、娘さらい、この半年ほどはそんな噂を聞かない日なんてないんですものね。あんまりひどすぎます。しかも、それがたいい浪人者で、三人、五人と組んで荒しまわるんだっていいいますから、いまにお江戸はどうなっちゃうのか、いやんなっちゃうわ」

「下手人はまだ一組もつかまっていけないんだそうだね」

「だから、あたし口惜しいんです。町方や加役組が躍氣になつてゐるのに、まだ手がかり一つつかめない、そんなことつてあるかしら」

お延の口ぶりはだんだん熱っぽくなつてくるようだ。

「下手人どものやり口が、それだけうまいつてことになるのかな」

「そんなこと自慢になんかなりはしないわ、いくらやり口がうまくたって、たくさんの人を泣かせてゐる憎らしい強盗なんだから、いつまでお天道さまが黙つて見てゐるんですか」

「たしかにそのとおりだ。しかしな姐御、こんどの押込み強盗はなにかの目的を持った浪人どもが、徒党を組んでやっているんで、その采配を取っている大將はすこぶる頭のいい奴なんだろうって噂もあるんだ。もしそれが事実だとすると、町方や加役組はまだまだ手を焼かせられるかもしれないね」

「樽平さんはいやに浪人強盗のひいきをするのね。なにかあるんじゃないかしら、いやらしい」お延は怒ったようにそんな憎まれ口をきく。

「冗談いうなよ。おれはおなじ浪人者でも金と力には縁のないほうなんだ」

「女もないんですってね」

「ついでに能なしときている」

「あるのは、なにかしら」

「まあ喰い気ぐらいのものかな」

「まるつきり色消しにできているのね」
ちようど新シ橋あたしの袂へかかつてきて、ふいに柳原土手のほうから、

「えいつ」

「わあつ」

という無気味な声が耳を打ってきた。

「やられたな」

「樽平さん」

さすがにすがりついてこようとするお延の手を引つつかんで、

「走るんだ、姐御」

平太郎はとつきに橋の上を走り出しながら、目は向うの橋袂を下手から上手へさつと駈けぬけて行く抜刀の男を見のがしてはいなかった。

まさか娘一人を残しておくわけには行かないから、手を取って駈け出したようなものの、女の足をいたわつてはいられない。しかし、それにしてお延もよくこつちについて走っていた。橋をわたり切つて、すぐ上手を見たが、無論抜刀の男の姿はどこにもなかった。下手を見ると、その大柳の下に誰か仰向けに仆たおれている。

「あそこよ、樽平さん」

お延が肩で大きく息を切りながらいう。

そばへ寄つて行つて見ると、仆れているのはまだ若い侍で、うしろから右袈裟に一太刀でやられてゐるらしく、すでに息は絶えているようで、血の匂いがぷうんと鼻についてくる。

「あつ」

その顔をのぞいて見るなり、お延が低く叫び声をあげた。

「知っている男か、姐御」

お延は黙つてうなずいていた。

そこへ近くの自身番小屋から出てきたらしい番太郎と鳶の者が、こつちを見かけるといそぎ足で近づいてきて、

「旦那、また誰かやられてゐるんですかい」

と、鳶の者のほうがいいながら、呆れたようにちらつとお延のほうを見る。

「うむ、一足おそかつたようだ」

平太郎は苦わらいをする。

「恐い、あたし。——行きましようよ」

お延が眉をよせながら、急に袂を引っぱるので、

「そうか、じゃ行こう」

平太郎は軽くうなずいてそこを離れた。

一一

お延はこつちの袂をつかんで、ぐんぐん豊島町通りへ誘いこみながら、しばらくは口をきこうとしなかった。これもほとんど人通りの絶えた淋しい町筋になっている。

「あの人たち、すぐには飛び出してこなかったのね」

ふっとお延がそんなことをいい出す。

「あの人たちって、番太郎たちのことか」

「ええ、川向うからだってあの叫び声は聞えたんですもの。すぐに番屋を飛び出してくれば、あの人たちのほうが早くきているはずなんですからね」

妙なことを気にするものだなとは思ったが、

「やっぱり恐かったんだらう。そういえば近所の者たちも出てこなかったね」

と、平太郎は調子をあわせておく。

「でも、本当はあたしだって恐かったのよ。あんなところを見るの、はじめてなんだもの」

「姐御はあの男を知っているといったね」

早くそれが聞きたかった平太郎なのだ。

「お店へ時々飲みにくる人なんです。——おかしいわ」

「なにがおかしいんだね」

「どうしてわざわざあんな物騒なところを歩いていたのかしら」

「なるほど、下にちゃんと道があるのに、わざわざ土手の上を歩いていたようだね。あの男の家はどこなんだろう」

「知らないのよ」

「名前は——」

「知りません」

「いつも一人で飲みにくるのか」

「そうなの。金払いはよかったのよ」

「たぶん、看板娘の姐御が目当てで飲みきたんだろう。くどかれたことはないかね」

「いやらしい、そんな。あの男辻斬りをやりきて、あべこべにやられたんじゃないかしら」

お延はそんな思い切ったことをいい出す。

「なにか思いあたることもあるのか」

「別にないけど、今から思うといつも陰気な顔をしていたし、浪人さんのくせに金には不自由していなかったようだわ」

「しかし、辻斬りをやりきたという恰好じゃなかったな。第一、ちゃんと顔をむき出しにしているんだからね」

「そういえば、そうね」

「むしろ、姐御をさらにきいていたのかもしれない」

平太郎はちよいと鎌をかけて見た。

「まさか——あたしなんかさらったって、一文にもなりはしません」

お延は一笑に付そうとする。これまでの例から見ると、浪人組が女をさらうのは、たいてい多額な身代金を脅迫するのが目的だった。もつとも、例外がないわけではない。

「今夜あの男を斬った下手人は、覆面こそしていたようだが、これも金が目的ではなさそうだ。あの男の紙入れは盗られてはいなかった」

「じゃ、なにか遺恨でもあったのかしら」

「物盗りでないとなると、遺恨か痴情ということになる。——そうだ、痴情ということも考えられるな」

「痴情なら女がからんでいるんでしょう」

「その女は姐御なんだ」

「なんですって——」

「あの斬られた男は、酒の匂いがしていた。あの男は今夜も姐御の店へ行つて飲んでいたに違いない。ところが、今夜は姐御の顔が見えないんで、どうしたんだろうと思っていると、そのうちに店の者の口から、姐御は神田明神下の叔母さんの家へ出かけているとわかった。あの男はとても姐御はくどけそうもないと見て、内心やきもきしていたところだから、よし、帰りを待ち伏せして引っさらつてやれという悪心をおこし、あそこまで出向いてきた。そこをうしろからつけてきた下手人に、ばつさりやられてしまったんだ。つまり、あの下手人も姐御の店の客で、姐御を狙っていた男なんだ。とすると、恋の鞘当てということになるから、原因は痴情ということになる。——少しおかしいかな」

平太郎は我ながら話がうまくできすぎてしまったことに気がついて、苦笑させられる。

「なんだか少しおかしいわ。あの斬られた男のほうはそうだったかもしれないけれど、下手人のような男が店の客の中にいたかどうか、あたしには思いあたるのが、なんにもないような気がする」

お延は案外まじめに考えこんでいるようだ。すると、斬られた男の横恋慕だけはちゃんと知っていたことになりそうだ。

「実は姐御、わたしはもう一つの考え方があるんだ」

「どう考えるの」

「あの斬られたほうも、斬ったほうも、ひょっとすると浪人強盗の一味じゃないかという考え方なんだ」

「いやよ、あたし恐い」

お延はぎくりとしたように、いきなりこっちの腕をつかんでぴたりと肩を寄せてきた。

「そうか、恐いか。——じゃ、この話はやめておこう」

平太郎も強いてそれを口にしようとはしなかった。

しかし、平太郎はこの考え方はだいたい当っているような気がするのだ、浪人強盗はこの半年あまり、常識では考えられない暴れ方をしている。狙うのは金のある家ばかりで、押しこむ前にかなりよくその家の様子や、地の利を調べているようだ。押しこむとまず家の者を残らず縛って一室に集め、見張りが一人つく。その土で主人か番頭に金蔵をあげさせ、大金を強奪して行く。反抗する者は容赦なく斬るが、おとなしくしていさえすれば怪我人は出さない。女を犯すようなことは決してしない。

その犯行が江戸の下町を中心に、全市にわたって二十件近く、金額にして二万両あまりにの